



満州語資料による満州語及び漢語の通時的音韻変化の研究

著者	山崎 雅人
号	16
発行年	1994
URL	http://hdl.handle.net/10097/14456

教授 中村 完 教授 花登正宏
助教授 千種 眞一

論文内容の要旨

本研究は満州語資料による通時的音韻変化の研究として、文献に漢字で表音された満州語文語の音韻変異と、他言語の研究に満州語資料を利用する例として漢文資料と満文史料の満漢対音により漢語の音韻変化について論じたものである。

満州語資料は清朝では漢語漢文化の移入と国書国語の振興のため非常に多く作成されたが、そのなかには満州語と漢語の音韻の対照、すなわち満漢対音によって相互に音韻を記述したものがみられる。漢字を用いて外国語音を表記することは、古くは梵漢対音・蔵漢対音などに、また明代の『華夷譯語』などでも知られる用字法であり（本研究の女真語再構形は主に『女真譯語』によっている）、これにより表音文字である満州文字が実際には異なって発音される場合の口語的音価を知ることができる。他方、17世紀前期に蒙古文字に機能的な改変を行い満州文字を作成した際に漢語音表記専用の文字を作ったことは、満州語からみた漢語の音韻の組織的な分析が成立したことを意味するものであり、こうした満漢対音を含む資料のうち漢語資料中の満州語音の漢字表音の用字法と満州語資料の中の漢語音表記から、当時の漢語音韻の状況について知ることができる。

清朝の代表的な満州語資料『満漢字清文啓蒙』(1730) (以下『清文啓蒙』) や『清語易言』(1774) などには、満州語の正書の綴りとは異なる発音になる場合の注記や例が漢字表音によって多数記され、また『舊満洲檔』などの初期文献にも後代の正書法とは違う異形態が記されている。これらは

同化・弱化・消失などの音声現象によって文語で用いられる正書法の形態と関連づけられる。そうした個別の変異は語の音韻環境により起こり、同語族のツングース語諸方言や借用の場合の蒙古語などの対応する形態を調べると、文語より変異の進行した形態かまたは文語の前段階にあり祖語により近いことを示す形態かを知ることができる。こうした個別の変異は、満州語文語だけでなく、これと同系統にある15世紀の明代女真語や現代語（錫伯語・東北方言）を比較した場合にも共通してみられる音声現象であり、満州祖語より継承されるこの言語の音韻的特徴と考えられる。

さて、上述のように、満州語音を漢字で音訳する場合の用字法から、また表音文字である満州文字で書かれた借用漢字語の音訳表記によって当時の字音の状況を知ることができるが、本研究では、漢語音韻史で近代音に起きた北方語の顕著な特徴のひとつである「尖団の合一」の一部をなす牙音喉音の舌面音化を扱った。これは団音と呼ばれる無気軟口蓋閉鎖音の見母 [k]、有気軟口蓋閉鎖音の溪母 [kʰ]、軟口蓋摩擦音の曉母 [x] が、狭母音 [i] [y] の前で調音点が移動しそれに伴って破擦音化してそれぞれ [tɕ]、[tɕʰ]、[ç] となる現象を指す（さらに尖音と呼ばれる無気齒茎破擦音の精母 [ts]、有気齒茎破擦音の清母 [tsʰ]、齒茎摩擦音の心母 [s] も同じく [i] [y] の前でそれぞれ [tɕ]、[tɕʰ]、[ç] になり、例えばそれまで区別があった「計」と「済」が、今日のように同じ音価で発音されるようになることを「合一」と言う）。初期の満州語資料にこの現象の反映がみられることから、北京官話を代表とする北方語では17世紀前半に牙音喉音の舌面音化が広く起きていたことを論じ、さらに一部では尖音との合一まで生じたとみるべき現象を指摘した。

本研究の主な構成は次のようになっている。

序説

第1部 満州語音韻の研究

第1章 満洲語における母音 -i- の弱化と軟口蓋閉鎖音口蓋垂音閉鎖音及び両唇閉鎖音の摩擦音化について

第2章 満州語文語における変異形について

第2部 漢語音韻の研究

第1章 満州語音訳漢字から見た漢語の牙音と喉音の舌面音化－『大清太宗文皇帝實録』を資料として－

第2章 借用語表記から見た漢語の牙音と喉音の舌面音化－『〔満文〕大清太祖武皇帝実録』を資料として－

結語

付録

以下では、本研究の2部4章の構成に従って具体的な例を挙げながら内容を略述する。

まず、満州語の音韻変異を扱った第1部のうち、第1章では満州語資料からふたつの現象について論じた。はじめは、『清文啓蒙』巻1の12字頭の si の項にあたる「此 si 字在聯字中間下邊俱念詩在聯字首念詩西俱可單用仍念西」という注記の表す現象である。この注記は、満州語の si が語中・

語末、語頭、単独という環境の違いによって異なる音価になることを記している。「詩」の当時の音価は無声捲舌摩擦音の [ʃɿ] であり、また「西」についてはほぼ同時期の『圓音正考』(1743) の存在から、[si] がすでに舌面音化して歯茎硬口蓋摩擦音の [çi] になっていたとみられる。さて、「詩」の字音の [ʃɿ] は本来満洲語の音韻組織にはなく、またこの漢字音を表す場合だけに用いられる si は満州文字としては余剰と考えられることから、満州語固有語の音節のバリエントに「詩」の音価が現れると考えることはできない。筆者は、この注記の意味することは「詩」「西」が表す捲舌音・舌面音の子音の違いではなく、アクセントのない語中・語末で母音が弱化消失して子音だけになる聴覚印象を異なる漢字を用いて表したものとする。また、語頭にあってこの弱化が起こらない場合についても、アクセントが関与していることが考えられる。アクセントが語頭にあることはアルタイ諸語に広くみられることであり、満州語の語頭アクセントは河野六郎、服部四郎らの現代語のフィールドワークにおいても観察されている。アクセントが語頭にあれば当然弱化は起こりにくくなり、si は「西」の字音に近い本来の [ʃi] で発音されると思われるが、文中においてはおのおの語の語頭が常に強く発音されるとは限らず文全体としての音調に左右されることもあるため、弱化が起こることもあり、それが「詩」に近い音価とみなされる場合と考えられる。同様の注記は sin, sing など si を持つ他の多くの音節にも書かれ、また満漢対音文献である『欽定清漢対音字式』にも同じ現象に基づく注記があることから、当時の口語的音価で綴りと異なる音価の変異が起きていることを表すものとみられる。さらに、si の母音が弱化することは、錫伯語などの現代音の資料においても記述がある。

次は、『清文啓蒙』『異施清字』中の軟口蓋閉鎖音・口蓋垂閉鎖音を表す -ga-, -go-, -gū- に、摩擦音の曉母字が対音漢字としてあてられている現象である。『欽定清漢対音字式』のこれらの音節にも、閉鎖音を持つ漢字と共に摩擦音の漢字で音訳する場合の注記が記されている。これらはいずれも語中・語末で起こる例であり、男性母音 -a, -o, -u が後続する場合、これらは非男性母音 -i, -e, -u に比べておおむね広い緩み母音であるため、閉鎖音の -g- の調音に際し完全な閉鎖を形成するにいたらず狭窄の段階でとどまって摩擦音で発音される場合があるため、それを -h- で書く変異体が存在するものとする。つまり、これも音声の変異に基づく現象と考える。非男性母音 -i, -e, -u に先立つ -g- の摩擦音化は、注記としてではなく個別の例として記述されていることから、元来閉鎖音を表していた文字の -g- を語中で摩擦音として発音することは、どの母音が続く場合でも起こることになる。しかしながら、文献における注記の有無という差異があるのは、男性母音が続く場合に比べその他の母音が続く場合の摩擦音化は、18世紀には未だ明確には認められていなかったためと考える。この現象もやはり現代音にもみることができ、男性母音に先行する場合に比べて非男性母音に先行する場合には -g- が語中・語末音節でも閉鎖性を保つ例がより多くみられる。これは狭い張り母音のより大きい調音的緊張が、先行子音の摩擦音化を起こさない場合があったためと考えられる。そして、この現象が語頭では起こらないのも、やはりアクセントがあるせいではっきりした発音になるためであり、逆に語中・語末で完全な閉鎖が形成されないことがあ

るのは、アクセントがないために調音的緊張が低下して調音様式の変化が起こるからと考えられる。先の現象「母音 -i- の弱化」とこの「軟口蓋閉鎖音・口蓋垂閉鎖音 -g- の摩擦音化」は、母音と子音の違いはあるが、同じメカニズムによるものと考えられる。

次に第2章では、弱化のような音的変異が先にみた -i- だけではなく、他の母音にも起こることを論じた。まず、文語と現代語とを比較して、以下のような現象により文語の形態から母音の変異が起きたことを示した。

順行同化 a > [i] : hairan [χ ærin]

逆行同化 e > [i] : efin [ʔ ifin]

弱化 o > [ə] : dobori [dīœvər]

消失 u > ∅ : asuki [ʔ æskj]

続いて、こうした母音の変異の記述が文献にもみられることを、『清文啓蒙』と『清語易言』の例を引いて明らかにした。

順行同化 e > u : kunesun > 枯奴(nu)孫 : 『清文啓蒙』, >ku nu sun : 『清語易言』

逆行同化 a > i : tarbahi > 他尔逼(bi)稀 : 『清文啓蒙』

弱化 u > e : umesi > e me ži : 『清語易言』

消失 u > ∅ : burulaha > bur la ha : 『清語易言』

二重母音化 a > ai : cabi > 釵(chai)批 : 『清文啓蒙』, >cai pi : 『清語易言』

同様のことは、『舊満洲檔』などの初期文語文献にみられる、後代の正書法からは逸脱する異形態の説明についても可能と考えられる。

次に、子音に関して、鼻音 ([n] [ŋ] など) と流音 ([l] [r]) の交替や鼻音の消失と添加など、文語と現代語の比較でみられるいくつかの現象について、文語資料にも対応する例があることを指摘した。

こうした音韻変異は、主にアクセントが関与しない語中・語末で周囲の音的環境に基づいて生じるものであることから、前章で扱った現象と同質とみなされる。

さて、このような現象は、さらに比較の対象を拡大して、満州語と同系統にあり文献的には先行する15世紀の明代女真語と比較した場合にもみることができる。ただし、他のツングース語方言や借用の場合の蒙古語などを比較対照すると、すでに指摘されてきたことではあるが、資料上先立つ女真語の形態が必ずしも満州語文語よりも通時的に先行するとは限らないことが分かる。はじめに女真語（以下で女真語は『女真譯語』の音訳漢字と再構形を記す）が通時的に先行すると考えられる例を挙げる。

順行同化 i > a : 哈子哈 ha[˥]jiha > hasaha

逆行同化 e > u : 脉出 me[˥]cu > mucu

弱化 u > e : 亦宣都 ishundu > ishunde

消失 a > ∅ : 弗刺江 fulagiyan > fulgiyan

単母音化 ia > o : 嫩江 niyongiyān > niohon

二重母音化 o > uwa : 瑣江 sogiyan > suwayan

また、子音や音節については、di > ji, ti > ci のような音韻構造の変化以外は、鼻音と軟口蓋音の変異が多いが、唇音の変化 (b > f : 阿卜哈 abuha > afaha) もみられる。

次に、満州語文語がより古い形態をとどめ、女真語の方が通時的に変異の進行した形態と考えられるものを挙げる。

順行同化 a > u : buda > 卜都乖 budu-goi

逆行同化 e > u : eshun > 兀速洪兀魯黑 ushun urhe

弱化 i > e : ergi > 脉^[sic] 児革以哈稱因 ergei hačīn

消失 a > ∅ : adali > 阿的 adi

母音挿入 ∅ > a : sargan > 薩那罕 sanaxan

二重母音化 i > ie : bimbi > 別厄塞因別 biye sainbi

同様のことは、子音や音節の変化についてもみることができる。なお、tubihe > 禿幹黑 tuwehe は、先述の唇音の変化と同じ b > f の例であるが、逆に満州語文語の方が女真語よりも通時的に先行する形態を保持していると考えられる。

このほか、現代語と女真語の形態が近く、文語がそれらと異なる個別的例がみられる。こうした豊富な音的変異は、祖語から現代語にいたるまで継承されてきた満州語の音韻的特徴と考えられ、満州語と女真語の資料の漢字表音を手がかりとしてその通時的变化の一端を明らかにすることができた。

さて、漢語の音韻変化を扱った第2部では、先述のように牙音喉音の舌面音化について論じた。まず、第1章では、漢文史料『大清太宗文皇帝實録』（以下『文皇帝實録』）の三種類の纂修版、すなわち順治本（1655）、康熙本（1682）、乾隆本（1739）の天聰9年の記録を満文史料の『舊満洲檔天聰9年檔』と対校させることにより、満州文字で書かれる満州語の人名や地名などの固有名詞を、『文皇帝實録』ではどのように漢字音訳しているか、またそれぞれの版の間でどのような差異がみられるかを調べることができ、この用字法の特徴に基づいて当時の漢字音の状況を論じた。

例えば、満州語の ajige を順治本（以下 A）では「阿吉格」と音訳していることに対して、康熙本（以下 B）と乾隆本（以下 C）では「阿濟格」としている。すなわち、同じ満州語音 ji [tʃi] を最初に成立した順治本では団音である見母字「吉」（『中原音韻』（1324）では齊微韻の [ki]）を用いているが、後の康熙本と乾隆本では、尖音である精母字「濟」（同じく齊微韻の [tʃi]）に書き替えていることがわかる。これは、順治本が作成された17世紀中期においては、見母が舌面音化してこれを持つ字はすでに現代音と同じ [tʃi] という音で読まれていたためと考える。満州語が対象とした漢語方言は北京官話に非常に近いと考えられ、17世紀前期には見母字を舌面音で読むことは北方共通語ではすでにかかなりの程度有力であったとみることができる。この音価の近似に基づく漢字の選択が後の康熙本・乾隆本では継承されなかったのは、規範意識のために人為的に書き直さ

れたからと考える。すなわち、規範的な漢字音によれば [i] の前でも見母は [k] という音価で、以下のそれぞれ右側の例が示すように、満州文字の gi(-) [ki] にこれをあてるのが正当と考えられるのであって、ji にあてるのはいわば俗音に従ったことになるからである。

banjin gintaishi beile jing san ginggūldai
 班 金(A) 金 台石 貝勒(A) 京 三(A) 京 俄兒代(A)
 班 津(B,C) 金 塔什 貝勒(B,C) 静 山(B,C) 荆 古爾代(B,C)

また、以下のように、ci [tʃ'i] の音訳でも、順治本では団音の溪母字「乞」(『中原音韻』では齊微韻の [K'i]) を用い康熙本・乾隆本では尖音の清母字「齊」(同じく齊微韻の [ts'i]) に書き替えている。このことも前と同様に、溪母字を舌面音の [tʃ'i] で読む漢語方言が音訳の基準とされたためと考えられる。

acitu taisi bakiran
 阿乞兔 台石(A) 霸奇蘭(A,B,C)
 阿齊図 太師(B)
 阿齊図 太錫(C)

さらに、『中原音韻』では「庚青韻」にあり [xien] という音価になる曉母字の「興」が、以下のように満州語の si [ʃi] を持つ語にあてられているもの、牙音と同じく喉音の曉母 [x] が [i] の前で舌面音 [ç] になっていたためであろう。康熙本・乾隆本の「星」は同じ韻母の尖音字で、『中原音韻』での音価は [sien] である。

baising hinggan
 擺 興(A) 興 安 (A,B,C)
 拝 星(B,C)

次に、A～Cの諸版で音訳に用いられる漢字の声母のパターンとその例数の累計を以下に記す。なお、集計の対象は三版全てに現れた例に限り、漢語からの借用語は除外した。

満州語音訳に用いられる漢字の声母のパターンと分布

J I	G I	C I	K I	S I	H I
ABC	ABC	ABC	ABC	ABC	ABC
1) 見見見	2 見見見	15 溪清清	16 溪溪溪	16 書書書	37 曉曉曉 8
2) 見精精	33 見影影	1 清清清	19 溪見見	1 書心心	13 溪溪溪 1
3) 精精精	5 莊見見	1 清昌昌	1 溪曉曉	1 書生心	1 心曉曉 1
4) 清清清	2 曉曉曉	1 昌昌昌	2 見見見	1 心心心	7
5) 清精精	3	見清清	1 清溪溪	1 曉曉曉	1
6) 溪精精	1		曉曉曉	2 曉心心	2
7) 莊莊莊	1			生心心	1
8) 章章章	1				

9) 章精精 1

10) 昌昌昌 1

次に第2章では、『〔満文〕大清太祖武皇帝實録』(以下『武皇帝実録』)の満文本を用いた。『武皇帝實録』には、満蒙漢の三言語の版があるが、満文本は一番の基になるもので、18世紀後期の乾隆年間に作られた『滿洲實録』とかなり細部にいたるまで一致した内容になっている。本研究で用いたテキストの成立は、崇徳元年(1636)の初纂本を改修した順治年間(1644-1661)とされ、全4巻のうち第1巻を欠いているが、残り3巻は合計197葉から構成されている。本文中には、固有名詞をはじめとする漢語からの借用語が数多くみられる。これらを『滿洲實録』の漢文本と対校することにより、牙音字・齒音字・喉音字に由来する語を抽出しそれらが満州文字でどのように表記されているかを調べることができる。

なお、第2部で用いたこれらの漢文・満文のいずれの資料にもみられる例は、そのもととなった当時の漢語音韻の状況を論じる根拠とするためにはいずれも量的には十分なレベルにある。また、写すべき漢字音として規範的性格の強い読書音を正音とみる伝統意識からの干渉の可能性は残るが、特に『武皇帝實録』は外国語資料である点から保守的性格の強い韻書に比べより実際の音価に近い状況を反映していると考えられる。

1. 見母字: li ji hiyoo(李繼学), ci jiya(戚家), cen jio jiyei(陳九階), jiyoo hūwa doo(覺華島), jiyan jiyūn doo(監軍道), jin jeo(金州), jen jiyang(鎮江), be jing(北京)
2. 精母字: dai ji bin(戴集賓), jiyei guwan ting(接官亭), ioi hūng jiyan(龔鴻漸), hūwang jin(黃進), fu jiyang(副將), jing an(靜安),
3. 溪母字: kio i ci(喬一琦), cioo me sung(蕎麥衝), k'ang ing ciyan(康応乾), cin dzung(欽宗), hiya guwe cing(夏国卿), lio cioi(劉渠)
4. 清母字: ci jiya(戚家), ciyan sung(千総), i du ciyang(一堵牆), cing hoo(清河), g'an ciowan pu(甘泉鋪)
5. 曉母字: li si mi(李希泌), hoo si hiyan/ hoo si siyan(賀世賢), sing san(杏山), ju si siyūn(朱世勲)
6. 心母字: jiyang si(江西), sio be se(蕭伯芝), sui zu sio(崔儒秀), boo cen siyan(鮑承先), li hūwai sin(李懷信), sioi guwe ciowen(徐国全)

見母 [k] を持つ漢字語の表記に無気後部歯茎破擦音の満州文字 ji(-) [tʃi] を用いているのは、『武皇帝實録』が作成された17世紀中期において、やはり舌面音で発音する漢語方言の音価でこれらの語を読んだためと考える。前に述べたように、満州語が接触した漢語方言は北方語のうち北京官話方言にきわめて近いものと考えられ、これも前章と同じく当時の漢語の舌面音化の状況を反映する言語資料とみなされる。また、同じ見母字でも無気軟口蓋閉鎖音の gi(-) [ki] で書写した例が若干みられるが、ひとつは漢語の方で舌面音化を起こす前の時期に借用された場合である。gi(-) で書かれたものに、普通名詞や固有名詞でも比較的早くから満州語の語彙に入ったと思われる ya

lu giyang (鴨綠江) などの地名が含まれることから、そのように推測できる。もうひとつは、漢語話者自身の音価のゆれの反映の場合であり、後述するように同一人名の表記に非舌面音・舌面音の二種類の書写があるものは、借用時期に大きな時間的差異があったとは考えにくいからである。

また、溪母字が有気後部歯茎破擦音の満州文字 ci(-) [tʃ'i] により書写されているのも、これらが舌面音で発音されたためであろう。同一の人名「喬一 琦」において、初めの溪母字は非舌面音 kio で写し後の溪母字は舌面音 ci として写していることは、まさに漢語話者の発音にゆれがあったことによると思われる。

さらに、喉音の曉母字も、舌面音化したものは後部歯茎摩擦音の si(-) [ʃi] で書写されている。また、同一の人名「賀世賢」に非舌面音・舌面音の二種類の表記があるのは、音価のゆれを反映した例であろう。

さて、次に漢語の音韻変化に関する第2の論点に移る。すなわち、17世紀前期に「尖団の合一」が部分的に生じていたとの見解である。この「部分的」の意味は「方言的・空間的」ということではなく、尖音の三声母 [ts], [ts'], [s] のうち最後の心母のみが狭母音 [i] [y] の前で舌面音 [ç] となり、先に舌面音化していた曉母と合一して同じ音価で発音されることがあったということである。そうした考えの根拠となる事実、心母 [s] を持つ漢字の項に満州文字の hi(-) で書写されている例がいくつか存在することである。すなわち、hioo seng (蕭聖)、boo ceng hiyan (鮑承先)、po(o) ting hiyang (頗廷相)、hiowan fu (宣府)、wang hiowan (王宣) である。これらは心母字であるから、規範に従えば満州文字では si(-) [ʃi] で写すことが予想されるにもかかわらず、このように hi(-) で書写されている。その理由として、これが満州語における漢字音認識の際の錯誤、すなわちこれらの心母字を曉母字と誤って考える hypercorrection のために hi(-) で写されたと考えられる。すなわち、こうした錯誤の生じた原因として、心母・曉母が同音価になっていた状況が考えられるのである。これと比較すると、『武皇帝實録』では精母字や清母字をそれぞれ gi(-), ki(-) で音訳した例は見出されない、破擦音はこのような状況にはなかったと思われる。これが部分的な「尖団の合一」が起きたとする理由である。

さて、これと同様の例を『清文啓蒙』にみことができる。それは満州語音節に漢字を対置させることでその音価を表している、巻一の「切韻清字」および「満州外單字」の対音漢字である。これらの例の中には、尖団の区別を正しく対応させているものが最も多いが、尖音字をあてるとき後部歯茎音の満州文字 ji-, ci-, si- を持つ語にそれぞれ見母 [k]、溪母 [k']、曉母 [x] を持つ団音字をあてている例がみられる。これらは先に挙げた『武皇帝實録』の例と同様に、団音が舌面音化したために近い音価の満州語音節に対置されたと思われる。さらに興味深いことは、この逆の対応、すなわち団音字があたるべき軟口蓋音の満州文字 gi-, ki-, hi- を持つ語にそれぞれ精母 [ts]、清母 [ts']、心母 [s] を持つ尖音字をあてている例がみられることである。これは、尖団の合一が起きたことを確実に示す資料である『圓音正考』原序が述べる、当時の北京官話話者の尖団の混同の様子を示すものと思われる。すなわち、『清文啓蒙』の成立は『圓音正考』に先立つこと10数

年に過ぎず、その著者はすでに尖団の区別がはっきりしなくなっていた北京官話の話し手であったために、このような混乱を生じたと考えられるからである。ところが、この『清文啓蒙』の著者舞格が満州語音については混同していないことは、gi-, ki-, hi- の音節の文字には軟口蓋音で発音することを指示した「此句咬字念」という注記を必ず付け、他方同じ漢字をあててはいても、ji-, ci-, si- の音節の文字にはそうしていないことから明白である。

つまり、北京官話を話す舞格は、注記を施すことにより語頭子音の弁別を行ったものとして、上述のように満州語音と漢字の尖団が合わない例があっても関知しなかったのであろう。『武皇帝實録』の場合とは規模こそ違うが、心母・曉母が同音価になったことによる現象としては同質のものとみなすことができる。

さて、前章でも『文皇帝實録』からこの心母曉母の部分的合一によるとみられる次の例を引用した。

coshil	hiya	taiji	
綽斯習兒	蝦	台吉	順治本 (1655)
綽斯希爾	蝦	台吉	康熙本 (1682)
綽斯希爾		台吉	乾隆本 (1739)

この例においては満州語音の -hi- を順治本では心母字の「習」（『中原音韻』では齊微韻の [si]）を用いて音訳し、他方それを改訂した康熙本、乾隆本では曉母字の「希」（同じく齊微韻の [xi]）を用いている。すなわち、これは初め「習」を曉母字と考えて用いた個所を後に改めたとみなすことができ、そこではやはり心母と曉母が同音価になっていた状況を想定するべきと考える。

以上、満州対音による満州語資料により、満州語と漢語のいくつかの音韻現象について論じたが、対音資料は双方の言語の基本的な音韻構造が明らかであれば、それらの言語の具体的状況を明らかにする手段として有効であり、非常に言語研究者の興味を引くものである。しかし、厳密な言語学的分析によるものではなく、言語外的事情に影響されることのある対音資料をナイーブに受け取ることは、常に危険であることも承知しておかねばならない。本研究はその点でいまだ完成の域にはほど遠く、可能性のうちのひとつを提示したところにとどまると言うべきであろう。清朝では翻訳の必要と中国文化の基礎とも言うべき音韻学への憧憬からか、さかんに満漢対音資料が作られ、かつて「較漢文翻切尤精當」と誇った工夫は、18世紀末に漢蒙藏回の四言語との対音にまで及ぶ『御製五体清文鑑』へとたどりついた。こうした満州語と外国語との音韻対照は、満州族の漢化と共に実質的な価値を失い、漢語との対音も『対音字式』のような往時の実用的な意味はもはや存在しないが、これらの諸言語の通時的研究のための資料として利用できることは清朝が残した大きな遺産と言ってよいであろう。

本研究では、対音資料という異言語間接触の産物を双方の言語の通時的音韻研究に利用したものであるが、近年中国東北部の満州族居留地区の言語調査をはじめとする現代語の調査もますます精緻かつ広範になってきており、また清朝檔案の整理研究が進みその成果が研究者に大きな便宜をも

たらずことが期待されている。今後は文献の分析と現代語の調査により文語方言の実態解明と現代語との照応が進めば、この言語の音韻史にさらに光があてられることになる。さらに、最近の満洲語資料による漢語史の研究では、語法・語用論など多岐にわたる分野での利用が試みられている。他方、漢語の牙音喉音の舌面音化の研究において、満洲語資料自体は17世紀よりさかのぼることはできないが、他の言語の対音資料であればこの現象の反映とすべき記述を見いだせる可能性があり、漢字表音に基づいて再構する女真語音も、さらに資料的価値のある文献が発掘解説され、より精密な分析によって特に12世紀の金代の音価が確定されるならば、今度は対音資料としての利用が可能になることが期待される。本研究は、このように発展の期待される対音・対照研究のひとつ具体例を提示したことになる。

なお、付録には、『御製増訂清文鑑』の満洲文字漢字音表記、『清文啓蒙』の注記、『清語易言』、『舊満洲檔 天聰9年檔』と『文皇帝實録』の順治本(1655)・康熙本(1682)・乾隆本(1739)の対校と『武皇帝實録』と『満洲實録』の対校などの影印資料を記載した。

論文審査結果の要旨

本論文は2部4章より成る。満洲語の音声変異を扱った第1部のうち、第1章では満洲語資料から二つの現象について論ずる。はじめは、『清文啓蒙』の注記が表す現象である。この注記は、満洲語の *si* が語中・語末、語頭、単独という環境の違いによって異なる音価になることを記している。論者は、この注記の意味することは「詩」「西」が表す捲舌音・舌面音の子音の違いではなく、アクセントのない語中・語尾で母音が弱化消失して子音だけになる聴覚印象を異なる漢字を用いて表したものと考える。また、語頭にあってこの弱化が起こらない場合についても、アクセントが関与していることが考えられる。アクセントが語頭にあれば当然弱化は起こりにくくなり、*si* は「西」の字音に近い本来の *[ʃi]* であろうが、文中では各々の語の語頭が常に強く発音されるとは限らず文全体としての音調にも左右されることもあるため、弱化が起こることもあり、それが「詩」に近い音価と見なされる場合と考えられる。

次は、『清文啓蒙』「異施清字」中の軟口蓋閉鎖音・口蓋垂閉鎖音を表す *-ga-*、*-go-*、*-gū-* に、摩擦音の曉母字が対音漢字としてあてられている現象である。『欽定清漢対音字式』の注記が示しているように、これらはいずれも語中・語末で起こる例であり、男性母音が後続する場合、これらは非男性母音に比べておおむね広い緩み母音であるため、閉鎖音 *-g-* の調音に際し完全な閉鎖に至らず摩擦の階段にとどまっているため、それを *-h-* で書く変異体が存在するものであって、これも音声変異に基づく現象である。

第2章では、弱化のような音的変異が上でみた *-i-* だけでなく、他の母音にも起こることを論ずる。関連の資料により例証しながら、主にアクセントが関与しない語中・語末で周囲の音的環境に基づいて生じるものであることから、前章で扱った現象と同質とみなされる。このような現象は、

さらに比較の対象を拡大して、文献的に先行する明代女真語と比較した場合にもみることができる。同化・弱化・消失・挿入・二重音化などを検証し、満州文語が女真語よりも通時的に先行する形態を保持する例をあげる。かかる豊富な音的変異は、祖語から現代語にいたるまで継承されてきた満州語の音韻の特徴と考えられ、満州語と女真語の資料の漢字表音を手がかりとしてその通時的变化の一端を明らかにした。

漢語の音韻変化を扱った第2部では、牙喉音の舌面音化について論ずる。第1章では、『大清太宗文皇帝実録』の三種類のエディションと『旧満州档』を対校することにより、満州文字で書かれた満州語の固有名詞の漢字音訳の仕方、各エディション間の差異を調査し、この用字法の特徴に基づいて当時の漢字音の状況を論ずる。第2章では、『満文・大清太祖武皇帝実録』にみられる固有名詞をはじめ漢語からの借用語を『満州実録』の漢文本と対校することにより、牙音字・齒音字・喉音字由来の語の満文表記を調査する。漢語の舌面音化以前に借用した場合と漢語話者自信の音化のゆれの反映の場合を指摘する。次にいわゆる「尖団の合一」の部分的に生じていたとする見解をとりあげる。si と期待される心母に hi があらわれる例は、心母・曉母が同音価になっていた状況を示すが、精母・清母のような破擦音には及ばなかったことがわかるという。逆の対応もみられる。団音字があるべき軟口蓋音の満州文字 gi-, ki-, hi- をもつ語にそれぞれ精母、清母、心母をもつ尖音字をあてている例がみられるのである。これは当時の北京官話話者の尖団の混合の様子を示すものであるが、『清文啓蒙』の著者は満州語音について混同していない。それは、注記を施すことにより語頭子音の弁別を行ったものとして、上述のように満州語音と漢字の尖団が合わない例があっても関知しなかったのであろう。

満州語の通時的研究では、女真語と文語、ないしは文語と現代語との比較は行われてきたが、満州語全体に及ぶ包括的観点からの分析はなかった。本論は母音の音声変異という点から解釈し、あわせて漢語の舌面音化の現象を例証として実践した。その価値は少なからぬものと考えられる。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。